

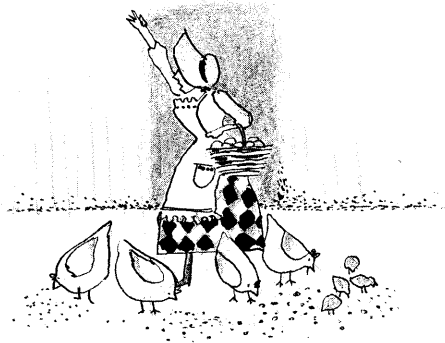
## 附属幼稚園の教育(II)

### 主体的に行動できるとは

村石 京

新教育要領の中には、幼稚園の教育は幼児の主体性を重んじることや、幼稚園の生活に於いては幼児が主体的に環境にかかわって生活する場であること等が述べてあります。附属幼稚園に於いても、園の生活は子どもたちが主体的に行動し、主体的に生活できるような場でありたいと考えて、日常の保育を進めております。

まず幼稚園の一日の生活の展開について述べてみますと、幼稚園の一日は子どもたちと教師との朝の出会いから始まります。一人ひとりの子どもたちは朝登園したときは、夫々の所属する部屋の中迄、母と子どもは一緒に来て朝の挨拶をします。そして子どもたちは手洗い、うがいをすませ、その後は自分たちの自由な活動に入るように



してあります。級の担任は、母親から何か連絡事項があればそのとき聞くようにしています。教師は朝の挨拶を子ども一人ずつと交わすとき、出席の確認をする意味あいと、一日のはじまりとして、子どもと出会うのときの意味あいを合わせて、大切に受けとめるようにしています。そしてその後の時間には、出席をとるために集まるとか、朝の集会をするとかいったことは一切行っていません。

子どもたちは登園してから帰るまでずっと自分たちの時間を持ち、自分たちで友だちとともに生活し、自分たちで環境にかかわりながらあそびをつくり出していくという生活が行われています。保育者は、子どもたちが自分たちで考えたことや、興味のあること、好きなことが、充分行えるような時間と環境をつくっていきたいと考え、努めています。

「主体性をもって行動し、自分で考えたり、創造したりできる子ども」「友だちとともに喜び、楽しみ、悲しみ、友だちと共感できる子ども」こういうことが教育の目標であり、ねらいとしているところなのであります。そのためには園の生活は子ども自身のものであり、自分たちで遊びをつくり出しながら生活し、その中で子どもは保育者の支えを受けて育っていくという考え方を持っています。

そして遊びの中には、様々な発達の可能性が含まれていることを思い、その可能性を伸ばし、その子ども一人ひとりに合わせた発達が進められるようにと、助言をしたり、援助をしたり、ともに遊んだりしながら、指導というものを行っていません。子ども自身の自発的なもの、能動的なものを大切にし、それを引き出し、より伸ばしていくとい

うことが保育における姿勢であります。つまり、教師が子どもの前面に立って子どもの行動を規定したり、促したりすることはしないで、いつも園の中では子どもが中心であり、子どもが主体になって行動していくことを基本として保育を行っています。

このことは入園当初から、そして三歳児も四歳児も五歳児も、園で生活するものはみな同じように幼児中心の生活をしているので、はじめの頃は新しい環境での不安と緊張から自分からは動けないでいる子どもたちもいますが、次第に自分を出し、自分から行動するように育っていきます。そして幼稚園に行ったら自分の好きなことをして友だちと遊べるという気持ちは喜びとなり、喜んで登園するようになります。五歳児などでは、今日は幼稚園に行ったら誰々とこれをして遊ぼうという目的を持って来る子どもも多く見られます。そ

して朝から考えてきたことを友だちと活き活きと話し合いながら進めたり、熱中して遊びに取り組んでいく様子も見られます。教師は、子どもたちの遊びがうまく進められるように、そして考えたことが実現できるように援助したり、必要な場や材料を一緒になって工夫したりしていきます。

勿論はじめは自分からは行動できなかったり、あるいはまわりのことに関係なく自分本意な行動をとる子どももいます。しかし教師の適切な言葉かけや、愛情を持った見守りを受けながら次第に気持ちが安定し、教師への信頼もできくるとともに、一方では園生活のリズムが身につくにつれて、段々自身を素直な形で現したり、行動したりできるようにもなってきます。そしてはじめは自分だけの世界であった子どもが、自分と教師、自分と友だちという他の人の存在にも気づき、共に行動することを喜びとするようになりま

す。

「主体的に行動できる」とは、自分自身で考え  
て行動していくことですが、その根底には次のこ  
とが備わっていることが大切となります。「自分  
のおかれている状況がわかってくる。まわりの様  
子が理解できる。そしてそれに合わせて行動する  
ことができる。自分の意志で判断したり、行動し  
たりしていくことができる。」これらのことは内  
容としては、三歳児、四歳児、五歳児と夫々の年  
齢に合わせて、段階をふんでいくことが大切であ  
ることは言うまでもありません。

指導する側として重要なことは、毎日の生活の  
中で築き上げていくことが大切なことは勿論であ  
りますが、子どもへのかかわり方や配慮のあり方  
を、年齢や時期、そして一人ひとりの個に応じた  
成長に合わせてながら対応していくことも大きな意  
味を持っています。このことが適切に行われない

と、子どもの主体性はよく育ってはいかれないと思  
います。幼児期は人間形成の大切な基礎となる時  
期ですが、この時に教師がいつも先へ先へと指導  
をしていくなら、子どもは必然的に受け身とな  
り、依存的となっていくます。あるいはまた、い  
つも入園当初と同じような扱いをしたり、過度に  
手をかけているならば、子どもの中に芽生える自  
分でやろうという気持ちは凋んでしまったり、失  
敗や困難にあってもくじけない強い心などが育っ  
ていかないかもしれません。

更にまた、子どもが年齢なりに自分の立場がわ  
かり、自分の意志で行動できるということは、自  
己の中に物事に対する判断力が備わってきたこと  
にもなります。これが人間としての自立です。人  
に言われたからするというのではなく、成長に合  
わせて自分自身で考え、判断し、行動していくよ  
うに育っていったほしいとのぞんでいます。

また自分の立場がわかって状況に応じて行動できるといふことは、裏返せば相手のことも見えてくるということだ。相手のことがわかることによつて、何かを行うときにも自己中心的な言動に偏ることなく、相手を思つて行動できるようにあります。

主体的に行動できることは、園の生活の中で自分自身で考へて遊んだり、活動したり、判断したりしていくことですが、その中に円満な人とのかわりがないことと、相手を感じやる気持ち、友だちの立場や心がわかる人間としての優しさなどを、幼稚園生活の中で友だちとの遊びを行っている間に、充分根づかせ、育てていきたいものと思ひます。更にまた、自分自身で自己をコントロールし

ていく力や、生活面での自立なども次第に蓄積されてこそ、全ての意味で主体的に行動できるといえるのだと思ひます。

そのためには園の生活は幼児にとつて、教師や友だちとの愛情や信頼関係に支えられたものであることが大切です。そして友だちと充分にかかわりながら生活を楽しむことが出来ることと、一人ひとりの子どもにとつて、自分の興味や関心に基づいた活動ができることが保障されてこそ、意味深いものになるのだと思ひます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)